

透谷全集

第一卷

昭和二十五年七月十五日 第一刷發行
昭和四十四年五月二十日 第十二刷發行
透谷全集

編者 勝本清一郎

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波雄二郎

東京都板橋區板橋四丁目四七番七號

印刷者 白井知一

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋ノ三

株式會社

岩波書店

落丁本・題丁本はお取替いたします

目次

詩

○楚囚之詩	三
夢中の夢	三四
朝霞の歌	三五
春駒	三六
春は來ぬ	四一
蓬萊曲	四二
蓬萊曲別篇	一六五
地龍子	一七五
みゝずのうた	一七七

一點星	一七
飛蝶	一八
ゆきだふれ	一九
みどりご	一九
平家蟹	一九
髑髏舞	二〇
古藤菴に遠寄す	二〇
彈琴	二〇
彈琴と嬰兒	二一
螢	二三
ほたる	二五
蝶のゆくへ	二七
眠れる蝶	二九
雙蝶のわかれ	三三
露のいのち	三五

評論及び感想（二）

「日本の言語」を読む	二二九
福音書を筆く人々	二三三
時勢に感あり	二三八
泣かん乎笑はん乎	二四二
文學史の第一着は出たり	二四五
「マンフレッド」及び「フォースト」	二四七
二宮尊徳翁	二五一
厭世詩家と女性	二五四
粹を論じて「伽羅枕」に及ぶ	二六五
「伽羅枕」及び「新葉末集」	二七一
「平和」發行之辭	二八〇
想斷々（一）	二八三
想斷々（二）	二八六

平和の君の王國	二八九
「白玉蘭」	二九四
「人肉質入裁判」	二九六
松島に於て芭蕉翁を讀む	二九七
「平野次郎」	三〇三
「後の月影」	三〇六
「油地獄」を讀む	三〇八
最後の勝利者は誰ぞ	三六
トルストイ伯	三二
蓮華草	三六
「浦島次郎蓬萊嘶」	三〇
「さゝきげん」	三三二
「猿蟹後日譚」	三三三
「二人女」	三三四
一種の攘夷思想	三六

幽境の逍遙	三四三
「歌念佛」を讀みて	三四五
徳川氏時代の平民的理想	三五三
眞——對——失意	三七四
電影草廬淡話	三七七
「まぼろし」	三八五
三日幻境	三八八
「文學一斑」	四〇一
時事	四〇三
解題（勝本清一郎）	四〇五

詩

楚囚之詩

自序

余は遂に一詩を作り上げました。大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たんとまでは決心しましたが、實の處躊躇しました。余は實に多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは默過して居たのです。

或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、底事（マコト）此の篇位の者です。然るに近頃文學社界に新体詩とか變体詩とかの議論が聳しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのけんち奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです、是れが余をして文學世界に歩み近よらしめた者です。

余は此「楚囚の詩」が江湖に容れられる事を要しませぬ、然し、余は確かに信ず、吾等の同志

が諸共に協力して素志を貫く心になれば遂には狹隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小説の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに難からずと。

幸にして余は尙ほ年少の身なれば、好し此「楚囚の詩」が諸君の嗤笑しせうを買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙ほ余は他日はれが罪を償ひ得る事ある可しと思ひます。

元とよりは吾國語の所謂歌でも詩でもありません、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此様にして余の詩を作り始めませう。又た此篇の楚囚は今日の時代に意を寓したものではありませんから獄舎の模様なども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた處です。

透谷橋外の僑寓に於いて

北村門太郎謹識

第一

曾つて誤つて法を破り

政治の罪人として捕はれたり、

余と生死を誓ひし壯士等の

數多あるうちに余は其首領なり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花なる少女も、

國の爲とて諸共に

この花婿も花嫁も。

第二

余が髪は何時の間にか伸びていと長し、

前額^{ひたい}を蓋^{おほ}ひ眼^{まなこ}を遮^{さへぎ}りていと重し、
肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、
沈^{しず}み、萎^{しな}れ、縮^{しゆ}み、あゝ物憂し、

歳^{さい}月^{げつ}を重ねし故にあらず、

又た疾病に苦む爲ならず、

浦島が歸郷の其れにも

はて似付かふもあらず、

余が口は涸れたり、余が眼は凹^{くぼ}し、

曾つて世を動かす辯論をなせし此口も、

曾つて萬古を通貫したるこの活眼も、

はや今は口は腐れたる空氣を呼吸し

眼は限られたる暗き壁を睥睨し

且つ我腕は曲り、足は撓^たゆめり、

嗚呼楚囚！ 世の太陽はいと遠し！

噫此は何の科^{とが}ぞや？

たゞ國の前途を計りてなり！

噫此は何の結果ぞや？

此世の民に盡したればなり！

去れど獨り余ならず、

吾が祖父は骨を戰野に暴せり、

吾が父も國の爲めに生命を捨てたり、

余が代には楚囚となりて、

とこしなへに母に離るなり。

第三

獄舎！ つたなくも余が迷入れる獄舎は、

二重の壁にて世界と隔たれり

左れど其壁の隙又た穴をもぐりて

逃場を失ひ、馳込む日光もあり、

余の青醒^{あをさ}めたる腕を照さんとして

壁を傳ひ、余が膝の上まで歩^{あゆみ}寄れり。

余は心なく頭を擡^{もた}げて見れば、

この獄舍^{ひとや}は廣く且空しくて、

中に四つのしきりが境となり、

四人の罪人^{つみびと}が打揃^{うちぞろ}ひて――

曾つて生死を誓ひし壯士等が、

無殘や狹まき籠に繋れて！

彼等は山頂の鷺なりき、

自由に喬木の上を舞ひ、

又た不羈^{ふき}に清朗の天を旅^{たび}し、

ひとたびは山野に威を振ひ、

慄悍なる熊をおそれしめ、

湖上の毒蛇の巢を襲ひ

世に畏^{おそ}れられたる者なるに

今は此籠中に憂き棲ひ！

四人は一室ひとまにありながら

物語りする事は許されず、

四人は同じ思ひを持ながら

そを運ぶ事さへ容ゆるされず、

各自かくじ限られたる場所の外ほかへは

足を踏み出す事かなはず、

たゞ相通ふ者としては

全じ心のためいきなり、

第四

四人の中にも、美しくしき

我花嫁……いと若わかき

其の頬の色は消失せて